

図書館思想の文化的源流とアレクサンド リア図書館

——文化主義による社会学的考察を基調にして——

草 野 正 名

まえがき

多くの図書館学者は、比較的ながら近代の文化という空間のなかで図書館学の本質を究明しようとしているかのように思われる。ところで筆者は、時間的に遡及して過去のギリシア（ローマ）時代の文化のなかに、既に、他の学問がそうであると同じように図書館学思想の本質的源流があるものとみている。しかも図書館文化学、図書館文化史を学問的根拠の一つとして標榜している筆者の学問的立脚からも、本稿では、専ら古典ギリシア期の文化的本質の一つを形成したアレクサンドリア図書館について考究しようとするものである。かつてドイツの歴史家ドロイゼンは、ヘレニズム時代の文化的高揚に限りない清新さを見出したのであったが、筆者もまたアレクサンドリア図書館の出現にはただ驚歎の声を発するばかりである。

Cultural Origin of Library Science and the Alexandrian Library

Prof. Masana KUSANO

The fundamental idea of Library Science is often discussed solely from the standpoint of *Space* in modern culture. I believe, however, that the consideration also should be paid on the lapse of *Time*. Tracing the history of Greece or Rome, I have arrived at the opinion that the fundamental idea of Library Science originated far in the Greek culture.

Since my theoretical basis is laid on "Library and Cultural Science" and "History of Library and Cultural Science," I made studies, in this thesis, on the Alexandrian Library which was built on the basis of cultural qualities of libraries in the classical period of Greece.

1. はじめに

世界の古代文明において最初の図書館をもったのは、メソポタミア (Mesopotamia) 文明か、中国文明か、エジプト (Egypt) 文明か、それとも印度文明かといったことを決めるのは今日のところ極めて困難な問題である。図書館の発生は、

文字をもつことによる文明の発生と期を一にしているとみられるのであるが、漸く文明化された民族が文字を記録するようになってから、その民族にとって記録したものを保存し、伝達してゆくべき図書館的機能が発生し、発達してゆくことは必然的であったと云える。しかし中国、ユダヤ (Judea)、印度、ペルシヤ (Persia) などの諸文明は古い歴史をもっているのであるが、図書館的な遺跡なども見当らず、今日、その古代図書館については殆んど何も知ることができない。そこで図書館的な遺跡、あるいは、古代神殿の記録文書、古代政庁の公文書類、また、富裕な古代市民の私的な商業的記録などの実物の残存、及び、そのほか図書館に関係ありとみられる僅少な資料などによって、今日、世界で最も古い図書館をもっていたのは学問的にも古代メソポタミア文明、古代エジプト文明であったと指摘されているのである。いうまでもなく西欧文化の源流、すなわち今日のヨーロッパ文化の母体となっているのは、古典ギリシア (ローマ) 文化の潮流であって、その古典ギリシア (ローマ) 文化の源流は、メソポタミア、エジプトなどの古代文明に遡るものとみられている。本稿で筆者は、未だそれほど図書館史のうえで明らかにされているわけではないが、近代図書館思想の源流ということ、古典ギリシア期図書館の文化的本質をいささかでも究明してみたいものと思っている。

今日、図書館学の鼻祖といえ、たとえば、ソーントン (Jhon L. Thornton) は、その著書「The Chronology of Librarianship. London, 1941」のなかで、イギリスのオックスフォード (Oxford) 大学図書館で1601年に画期的な主題目録を創案して公にしたとしてゼームス (Thomas James) の名をあげている。これに対しプレディーク (Albert Predeek) は、その著書「A history of Library in Great Britain and North America. Chicaog, 1941」のなかで、大英博物館 (British Museum) 図書館部でパニッツィ (Antonio Panizzi) が1836年に完成した目録規則を高く評価し、1836年をもって図書館学成立の年とみなしている。その後、アメリカの図書館学思想もまた実用的で技術的な領域で発展し、19世紀末にはコロンビア (Columbia) 大学のデューイ (Melvil Dewey) 教授の考案した十進分類法 (Decimal classification)、およびボストン・アシニアム (Boston Athenaeum) 館長であったカッター (Charles Amni Cutter) の辞書体冊子目録規則 (Rules for a Printed dictionary catalogue) が公にされ、いはば英米系の図書館学思想としての実体である分類学・目録学は一応の完成をみる形となった。そして、わが国の図書館学思想も殆んど英米系の図書館学思潮を継承してきたもので、分類・目録という技術的領域を図書館学の本質として論ぜられてきていた。こうしたことから武居権内氏は、その著書「日本図書館学史序説」(昭和35年発行)のなかで、「わが国においては、ドイツ及びアメリカにおいて示された図書館学の諸傾向が混沌とした形において、戦後より最近にかけて展開されているのである。わが国において、図書館学の範囲のうち、技術面はある程度まで戦前において発展したのであるが、理論面においては未だ見るべきものもなく、最

近において理論づけが行われようとする傾向である。」というように、わが国の図書館学界の現状を指摘されている。それでは武居氏のいう、ドイツの図書館学思想とはどういうものを指すのであろうか。たとえば、ドイツのキルヒナー (Joachim Kirchner) は、その著書「Bibliothekswissenschaft. Heidelberg, 1951」のなかで、ミュンヘン州立図書館のシュレティンガー (Martin Schrettinger) が1808年に刊行した著書「Versuch eines Vollständigen Lehrbuches der Bibliothekswissenschaft」の内容が、はじめて図書館学を学問的にとりあげる端緒を開いたものとして、シュレティンガーをして図書館学創始の鼻祖であるという見解を示している。シュレティンガーは、その著書「Handbuch der Bibliothekswissenschaft」のなかで、「図書館学とは、要するに確固とした原則のうえに体系的にうち建てられ、一つの最高の原則に到達するものであり、図書館を効果的に組織するために必要な教則を総括したものである。」というように図書館学を定義づけ、「理論において詳細な技術に関する妄想を払いのけて」、はじめて純粋な図書館学の学問的基礎が設定されるものであることを強調している。上述してきたことから、英米系の実用的な図書館学思想と、ドイツ系の学理的な図書館学思想との間にみられる学問的相違についてもある程度知ることができるものと思う。

ところが今日では、実用的な図書館学思想に対立してアメリカの図書館学界でも、たとえば、シカゴ大学教授のバトラー (Pierce Butler) が1933年に刊行した著書「図書館学序説」(An introduction to library science) のなかの図書館学思想では、従来のような図書館学思想における技術の面を捨象して、図書館学の本質を社会学的基盤などによって論じようとするものとなっている。バトラーの図書館学思想は、見方によればドイツのシュレティンガーの図書館学思想系統を継承したものとみるべく、その図書館学思想は社会学的背景によって、現代的に学問的に展開しようとするものであった。今日、わが国の図書館学界でも注目を浴びるに至っているアメリカの代表的な図書館学者であるシェラ (shera, J. H.) の図書館学思想は、バトラーの図書館学系思想の展開というべく、1972年に公にした著書「The Foundation of Education for Librarianship」などのなかでは、図書館を文化伝達の教育的機能をもつ社会機関として論じている。極めてユニークな図書館学文献とみられていた、バトラーの著書「図書館学序説」と並んで、既に1954年に公にされたドイツのカールシュテット (Peter Karstedt) の著書「図書館社会学研究」(Studien zur Soziologie der Bibliothek. Wiesbaden, Harrassowitz, 1954) もまた図書館社会学によって学問的体系化を志向するものであった。筆者は、1979年発行の「図書館短期大学紀要」(第16集) のなかで、「バトラーも、シェラも、カールシュテットも、その図書館学思想の本質に、機能主義的な社会学思想をも導入しているとみるべく、図書館を一つの社会制度を形成する機能として考察していることでは共通している。」というようにその学問的共通点を指摘しつつ叙述したのであった。

わが国の図書館学思想が、今日、一方には技術主義、他方には学理主義と双方がいはいば混迷して論ぜられているとき、たまたま筆者は「図書館短期大学紀要」〔第16集〕のなかで、図書館学思想に sein の学としてだけでなく、あくまでも sollen を含めた学とし、理念（学）と現実性（技術面など）との両者を包含したのものとして、「筆者は図書館学とは人間学、文化学等の本質に深くかかわることを拙著などで持論として強調してきているのであるが、とりたてての論拠をあげれば、その実際の図書館活動は、図書資料の保存、図書資料の奉仕、図書資料の整理等の各種機能を総合する機能体であって、しかも今日の図書館活動は、広義の読書（研究・調査等によるものを含め、広く図書資料の利用）による間接経験（あるいは知識化）からくる文化的な、教養的な、学術的な人間形成をめざす社会制度の一環としての文化的機能を定着化せしめつつあることを前提とするということであった。」というように図書館学思想の本質を定義して述べている。

上述してきたように、今日、社会制度の一機能を果すものとしての図書館が論ぜられ、図書館社会学が、わが国の図書館学界としても、図書館学思想の発展として漸く受容されつつある。しかし著者のかかげる標題は、古典ギリシア期図書館の文化的本質の一側面を考究しようということで、もちろん近代の社会制度としての図書館を直接対象としているものではない。そこでもし機能主義図書館社会学思想が近代社会のなかの図書館を主に対象とする空間的認識論にとどまるものであるならば、古典ギリシア期図書館という時間的認識論を必要とする筆者の標題思想とはいささか趣を異にし、いはば内容的に一線を画することとなる。かねがね筆者は、現在を媒介とし、過去・未来を展望する図書館文化学、図書館文化史を学問的根拠の一つとしており、しかも本稿では、標題副題のように文化主義による社会学的考察を基調とする、それも機能主義による空間的認識論主体ではなく、むしろ文化主義による時間的認識論主体によって、学問的に標題の内容を叙述しようとするものである。そのことは、ときに図書館学者によって図書館の文献宇宙思想、あるいは有機体説が論ぜられ、パトラーのようにスコラシップによる完成されてゆく資料組織体が論述されるような空間的認識論によるものというよりも、むしろ時間的認識論によるいはば古典的思想を尊重する文化的思潮論によって叙述されているものと云えるであろう。

2. 古典ギリシア期図書館の源流

メソポタミア文明の図書館 古代社会に文字が発生し、多くの記録が蓄積されてゆくにつれ人類の文明化も進んできた。そして図書館の歴史は、まず文書館の発生ということで始まった。古代社会において、殊に記録・文書類の保存と利用をもっとも必要としたのは、宗教家とか、為政者とかであったので、原始形態としての図書館（文書館）の発生は、神殿とか、政庁とか、宮殿とかであったろうとみられている。ついで漸く文明化された社会のなかで、商業・家系・財産などの記録・文書を保存する富裕な市民による私設文庫も現われるようになった。そ

うした公私にわたる文書館にやがて歴史的・文学的・医学的・天文学的などの保存資料を加えつつ、漸く利用されるようになってきた古代図書館の発展の跡がみられる。

そして一般的には神殿図書館は、宮廷図書館より早く発生したものとされ、既に古代神殿には、民衆の生活に密着した宗教行事にたずさわり、また教育にもたずさわる、文字を読み書きできる多数の知識僧がいた。

メソポタミアの古代文明では、最も古い粘土板文書 (clay tablet) がユーフラテス河沿いのウルクの神殿跡から多数発掘され、シュメル (Sumer) 人は、紀元前2700年頃に大規模な文書館、あるいは図書館を設けていたことが知られている。ウルクの神殿が所蔵した粘土板文書の書体は、象形文字であった。それがラガシュ附近のテロで発掘された政庁文書館所蔵の粘土板は約3万枚に及び、すべて楔形文字に進み、紀元前2300年以前に遡るものとみられている。ウル (Ur) の廃墟からは、高度の文明社会に発展しつつあったことを思わせる、国立裁判所の記録を含み、ハンムラビ法典より数百年以前ものものとみられている法典をも混えた、粘土板文書の大所蔵庫としての法律図書館が発掘された。メソポタミア文明の最盛期の一つをなしたのは、バビロニアのハンムラビ (Hammurabi 1728~1686 B. C.) 王のときで、模範的な古典的文明時代を現出した。その文明を象徴する歴史編纂がなされ、また、その統治の高度さを物語る法典編纂をも完成するに至った。こうしたすぐれた文化的編纂が達成されるためには、豊富な資料が、利用し易いように組織化された図書館がなければならなかったものとみられている。

古代バビロニアの一市であったニップール (Nippur) は、政治的都市というよりも宗教的な中心地であったが、その市の神殿は天地の紐帯とあがめられ、その神殿図書館跡からは、讃美歌、祈祷文、歴史上の記録、シュメル人の伝説などを含む、全バビロニアの人々から奉納された供物を記録する、多数の粘土板が出土された。古代の大規模な神殿図書館は、当時の知識僧を育成する写字生養成学校を附設していたが、ニップールの神殿にも、写字生養成学校があり、その学校図書館には教科書、辞書、文法書などを整備していた。

上述したほかにもメソポタミアのアシュア (Ashur)、ウル (Ur)、ニップール、キッシュ (Kish) などの諸都市の各所から多数の粘土板が出土され、紀元前2000年以前に多くの公共図書館や私設文庫のあったことが知られている。

紀元前8世紀にバビロニアはアッシリアによって征服され、紀元前705年に死去したアッシリアのサルゴン朝の開祖サルゴン (Sargon) 二世は、コルサパッドに宮廷図書館を設けている。その後、アッシュルバニパール (Ashurbanipal 668~626 B. C.) 王は首都をニネベ (Nineveh) に移し、ここにすぐれた王室図書館を設置したことによって、図書館史上からもこの王の名を不滅のものとした。その図書館には書写室が設けられ、20人以上の学者や写字生がいて、シュメル語、アッカド語の古文書を収集し、アッシリア語に翻訳し、整理を完成させ、3万点以上の粘土板文書を集蔵するに至った。その図書館にはまた、すぐれた書誌学者

がいて、粘土板の校訂、編集などにあたり、粘土板の古文献を解読するための楔形文字の辞書も備えられていた。粘土板の蔵書は、それぞれの主題図書室に歴史、天文学・数学・医学、文法、宗教・神話・伝説、詩、書簡、記録文書などに別置され、粘土板は土製の壺に入れて、棚上に整然と保管されていた。主題図書室の壁には、蔵書のリストが書かれ、また、各室の入口には、著作のリスト、粘土板番号、標題、行数、章節、所在標示などが記入された、目録ともいべき粘土板がおかれ、利用されていた。

こうした古代図書館の機能をつうじてみても相当高度に発達していたアッシリア文明の一端を窺い知ることができるのであるが、殊に、その王室図書館が当時のアッシリアの学問界に及ぼした影響は極めて大きかったものと思われる。アッシュルバニパール王は王室図書館のほか、神殿図書館をも設置したものとみられているが、その神殿図書館は、アッシリアの文字の神ナブ(Nabu)を図書館の守護神として設けたものかと思われ、一般市民には非公開のものであったようにもみられる。しかしアッシュルバニパール王が、わざわざ王室図書館のほか、多くの市民が礼拝に訪れる神殿に図書館を設置したということは、それが王の意図した公共図書館ではなかったかということも十分に考えられる。その考察のいかんは、三、四世紀あたりの古典ギリシア期に出現したアレクサンドリア図書館との先例関係にもかかわりをもつこととなるともみられる。ただ、古代の神殿図書館はその文明の一象徴であり、写字生養成学校を附設するのが通例であったので、一つには写字生養成のためにアッシュルバニパール王がその神殿図書館を特に設けたものとすれば、後世の王立のアレクサンドリア図書館のうち学術図書館のように、その王室図書館には未だ写字生養成学校を設けるまでに至らなかったものとみられる。

もちろん今日でもアレクサンドリア図書館はアッシュルバニパール王の図書館を模倣したものではないかという図書館学者もいるが、『A History of Libraries, translated, with supplementary material, by Reuben Peiss. 1950』の著作のなかでヘッセル(Alfred Hessel)は、アッシュルバニパール王の図書館とアレクサンドリア図書館との間には年代的に約400年の距りがあり、模倣したものであると俄かに断定することは困難である旨を述べている。ただ筆者としては後述するように、文化史上の潮流から判断して両者の間に先例関係が全くなかったと断定することもやはり困難であるように思われる。

一〇一 いづれにしてもアッシュルバニパール王の図書館は、高度に発達したメソポタミア文明を表徴するものの一つであったが、紀元前7世紀末、アッシリアの滅亡とともに、アッシュルバニパール王の図書館はもとより、メソポタミア文明そのものが歴史的な生命を失うこととなった。

エジプト文明の図書館 エジプト文明の発達とともに、図書館がどのように発展していったかということも多く叙述することは極めて困難である。というのも図書館の歴史を辿ろうとしても、具体的な参考資料としては文書の断片、墓の

絵、壁面の銘文などが僅かに残存しているに過ぎないからである。エジプトの古王国時代（2860～2181 B.C.）には、王は神の顕現、全神官の長、ピラミッドは篤信の行為の結果とされ、また、美術や文学は、神殿や墳墓の装飾としてはじまり、学芸は神殿に集中していた。古王国時代の古代文明では、おのおの文教の中心をなしていたヘリオポリス（Heliopolis）、メンフィス（Memphis）、ヘルモポリス（Hermopolis）、テーベなどの神殿には書写室が設けられ、記録にあたる学識ある写字生がいて、神学書、祭事、神々の伝記・神話、医学書、天文学書などを多数集蔵する神殿図書館の発生と、その発展を促がした。ヘルモポリスの神殿では、写字生によってトートの聖典といわれる宗教・文学・学芸・暦法・科学などに関する語彙集といってよいものが多数書き残され、それが神殿図書館に発展した。それらの神殿図書館跡ではまた多数の医学書が発見され、市民のための治療所でもあったとみられ、医学や天文学などがエジプトの宗教と密着していたことが知られるのである。

エジプト文明でも、メソポタミア文明の場合と同じように、その古代文明を開発してゆく有力な原動力の一つとなったのは神殿であり、その神殿図書館には、一般人に公開する公共図書館と神学書を収めた聖職者専用の図書館とが設けられるに至った。また神殿図書館は、当時の学識者を育成する写字生養成学校を附設し、その図書館には教科書、文法書、歴史書、文学書、倫理・道徳書などを備え、学生の利用に供した。

エジプトの政庁文書館は、既に、初期王朝時代（3200～2780 B.C.）に発生したとみられ、古王国時代になると公的利用のための宮廷図書館に発達していた。ペドケル王（Pedkere-Isesi 2683～2655 B.C.）の宮廷図書館には、書写室が設けられ、学識ある写字生がいて、その職は世襲制であった。図書館は学芸の神であるトート神の保護を受けるものと信ぜられ、きわめて神聖な場所であった。そこには公文書、通信、年代記などをはじめ、統治、収税、記念碑の建造、裁判、軍事、外交などに関する記録文書類が納められていた。第四王朝（約2600 B.C.）のクーフウ（Khufu）王も図書館を設けていたが、エジプト文明では、書写し易い材料としてのパピルス紙が古王国時代の第五王朝（2494～2345 B.C.）頃から盛んにもちいられ、王朝の諸記録をはじめ、宗教上の行事、詩文などがすらすらと草書体の文字で書かれるようになった。テーベ、メンフィス、エデフ（Edfu）、フィレ（Philae）などにも宮廷図書館があり、紀元前3000年のエジプト文明の間には多くの宮廷図書館があり、それらの中には多数の学者が利用した大規模なものも存在したのではないかという説もあるが史実上からは明らかでない。しかし、メソポタミア文明の場合と同じようにエジプト文明でも大規模に発達した宮廷図書館では、資料を翻訳し、校訂し、編集したりする学者といえる文献に詳しい写字生がいたものとみられている。

古代文明で多くの私設文庫が発生してくるということは、その古代文明にとって読書人口の増大であり、高度な文明への発展を示すものであった。エジプトの

富豪や貴族などの私設文庫の場合には、富豪や貴族たちは写字生を雇うか、奴隷を訓練して記録や書写にあたらせ、そのような文庫には、家系、家事の記録、書簡集、それに旅行記、戦記物、冒険談などのような読み物、ときには科学、数学、医学などの学術書も集められていた。私設文庫は、離れの室か書斎があてられ、戸棚にパピルス紙本が陶製の壺に入れて保管された。ときに愛読した文学書を文庫の所有者が死ぬと、祈祷文の記されている宗教儀式用の「死者の書」(Book of the Dead) とともに、その墓に別の陶製の壺に入れて埋めるようなこともあった。

書写しやすいパピルス紙が多量に生産されるようになってから、文字の発達はやめざましく、エジプトの書物と図書館は、いちじるしく発達をとげたものとみられていながら、ただ、メソポタミア文明の図書館と較べてもエジプト文明の図書館は、文明の潮流のなかで文献や図書館を保存してきたということで今日残存する史実が余りにも少ない。殊に紀元前 671 年、アッシリアに攻略されてから、神殿や宮殿は破壊され、写字生は奴隷として連れ去られ、パピルス紙本類の多くがアッシリアに奪い去られたのであるが、その後、アッシリア文明では学芸の振興とともに、図書館の発展をいちじるしく促進した。

3. 古典ギリシア期図書館の発展

ギリシアの図書館が文化的に重要な意義をもつに至ったのは、一般に考えられているように紀元前 6 世紀から紀元後 3 世紀にわたる、いわゆる広義の古典ギリシア期においてである。古典ギリシア期の図書館が発生してくるまでに、既に述べたようにメソポタミア、エジプトの両古代文明では 3000 年以前から文書館の発生と、図書館の発展がみられた。古典ギリシア期の図書館が、その両古代文明の図書館思潮の影響を受けたであろうことも既述のヘッセル著の「図書館史」のなかなどでも指摘されていることである。

ギリシアでは、既に紀元前 14 世紀頃ピーロス (Pylos) やミケネ、それにクレタ島のクノソス (Knosos) などには多数の粘土板を所蔵した文書館があった。しかし紀元前 12 世紀頃には、その文字文明は北方の蛮族の侵略によって滅びて仕舞った。そのためギリシアやエーゲ海の島々では文字記録をもたない数世紀があり、ホメロス (Homer) の時代には未だ書写も定着していなかった。イリアドとオデュッセイアは、長い間、口伝の叙事詩として語られ、伝承されてきたのである。しかし紀元前 7 世紀頃には両び文字も普及しはじめ、その頃になってイリアドとオデュッセイアはパピルス紙本に書きおろされたのである。古典ギリシア期の図書館はこのような文字記録の普及につれて発生し、その発展をみることもなった。それにしても図書館が真に発展するためには、まず図書館の利用を必要とする文字を読み書きできる多数の読書人口がなければならぬ。ところが今日、古典ギリシア期の図書館の発展については、殆んど遺跡もなく、また図書館のことにふれた記述も僅かな文学作品にみられる程度でいくらかも残存していない。

ローマの作家アウルス・ゲリウス (Aulus Gellius 123~165) によれば、紀元前6世紀のアテネの僭主ペシストラトス (Peisistratos 605~527 B.C.) はその豊富な個人文庫の蔵書を寄贈し、アテネではじめて公共図書館を設けたと伝えている。ところでゲリウスの生存していた紀元後2世紀は、ローマでは文教政策の一環として公共図書館が発展し続けていた時代で、ゲリウスがローマの公共図書館の源流をギリシアのアテネに求めたものともみられ、古典ギリシア本土を重視する文化史の思潮から判断して、極めて関心のもたれる説明になっていると云えよう。しかし、アテネのその公共図書館については今日でも確証を得られないままであって、俄かにその説明に同調し難いものがある。ただ紀元前6世紀のアテネでは、既に読書人口も増大し、公共図書館の発生する読書基盤をいちじるしく醸成しつつあったことは否定できないことである。アテネの青空に聳えるパルテノン (Parthenon) 神殿は古典ギリシア文化の源流として既に紀元前438年に巨大にして壮麗な偉容を現わしていたのであるが、何といても古典ギリシア学芸の最盛期はプラトン (Platon 427~347 B.C.)、アリストテレス (Aristoteles 384~322 B.C.) などの活躍した紀元前5世紀から紀元前4世紀にかけての時代で、ギリシアの図書館の真の発展も、この時期に始まったとみられている。一般にプラトンはかなりの蔵書を保有する個人文庫をもっていたものと信ぜられており、彼がアテネ郊外に開いた学園には学校図書館も設けられていたものとみられている。アリストテレスは若きアレクサンダー大王の教育係となったが、その後アテネの神域に学校リュケイオンを開き、その学校には標準写本を集め、アレクサンダー大王もその写本の収集を援助したと云われている。偉大な学者であるアリストテレスが図書館蔵書の重要性を誰よりも強く認識していたであろうことは十分に察知できることである。アリストテレスの死後、その私設文庫の蔵書の一部はローマへ、他の一部はアレクサンドリア図書館へ伝わったと云われている。ここでもその史実とされていることは、古典ギリシア学芸文化の潮流が大きく、アレクサンドリアとローマの双方に影響していることとも符合し、古典ギリシア本土を重視する文化史のうえからも興味深い説明となっている。

古典ギリシア本土には1,100人以上のギリシア人作家のことが知られており、アテネでは図書の生産も豊富で読書人口もいちじるしく増大し、テオスのアペリコン (Appellicon of Teos) も述べているように、ギリシア人の著作を収集することが一般化し、富豪、学者の間では個人蔵書家はごく普通のことになっていた。

知られている個人文庫としては、サモス島の僭主ポリュクラテス (Polycrates 522 頃死 B.C.)、劇作家エウリピデス (Euripides 480~460 B.C.)、エウテュデモス (Euthydemus)、エウクリッド (Euclid)、イソクラテス (Isocrates 436~338 B.C.)、クリアクス (Clearchus 353 頃死 B.C.)、雄弁家デモステネス (Demostenēs 384~322 B.C.) などがあげられ、ラレンシス (Larensis) は紀元前4世紀に最大の私設文庫をもっていたと云われている。

読書人口がいちじるしく増大してきていた証左の一つでもあったが、アテネには、紀元前330年にはじめて公共図書館が設けられ、これはアイスキュロス (Aischylos 525～456 B. C.), ソホクレス (Sohocles 496～406 B. C.), エウリピデスのギリシア三大作家の標準写本を保存するため創設されたものと云われ、公開図書館であると同時に、著作の登録所の役目をも果たしていた。紀元前3世紀頃のアテネでは、希望するどのような種類の図書でも閲覧できる状況であったが、「COMMUNICATION: A Concise Introduction to the History of the Alphabet, Printing, Books and Libraries. 1966. Originally published by Scarecrow Press, Inc. New York.」の著作のなかでE・D・ジョンソンは、紀元前3世紀になると「アテネそのほかのギリシアの大都市には、公共図書館、私設文庫、学校文庫が設けられ、地中海沿岸の各地から多数の学者が学問研究のために集まってきた。」というように叙述している。

4. 古典ギリシア期の大図書館

アリストテレスに学問的教えを受けたアレクサンダー大王が、その東征(334 B. C.) などにより創見された世界観は、アリストテレスのいう都市国家(ポリス)による理想国家の実現を超えた、しかし、その植民地国家を統治する指導原理はギリシア文化思想であるとする、全人類可住の単一世界国家の建設ということであった。かくて小アジア、エジプト、シシリーなどギリシアの文化的支配の及んだ植民地では、ギリシア文化とオリエント固有文化との結合による、いわゆるヘレニズム文化の成立をみることとなった。そこで古典ギリシア文化は、オリエント、中央アジア、インド、さらに東方にまで影響を及ぼし、また、西方ではローマ人に受け入れられて西欧文化形成の主潮となった。このようにしてギリシア文化の領域が広められて、ひとつの世界的文化として登場することとなった。しかし、アレクサンダー大王自身は、若くして死去したので、アリストテレスの助言による学問的文化世界の建設を、国家の計画する文化政策にまで実現せしめることはできなかった。アレクサンダー大王の歿後、古典ギリシア期の植民地では王朝が大きくは、アレクサンドリアとペルガモンに分立した。そしてギリシアの文化的支配の及んだ植民地には多くの図書館の設立をもみたが、これら図書館のなかには、ギリシア本国の図書館以上に大規模なものもあった。その代表的なものとして、いわゆるペルガモン図書館とアレクサンドリア図書館の2館が古典ギリシア期文化の発展を表徴する二大学術図書館として出現をみたのであった。

九
七

ペルガモンの図書館 ギリシアの植民地であった小アジアのミシア地方は、国王として君臨したアッタロス (Attalus) 王家のエウメネス二世 (Eumenēs II, 在位 197～159 B. C.) によって、首都ペルガモン (Pergamon) は学芸の中心地として最繁栄期を迎え、アレクサンドリアと並んでヘレニズム文化の中心となった。ペルガモンは代表的なヘレニズム都市として、その都市は丘の上にあり、頂上には 宮殿・神殿・図書館、中腹にはギリシア人の住居・競技場・劇場があ

り、ふもとには原住民の小アジア人の住居があった。

エウメネス二世は、その王国にギリシアの学者を集め、学問を振興し、世界的な王室の学術図書館を建設しようとした。その図書館はアテナ (Athena) 神殿に隣接して設けられ、歴代の王がギリシア中の書物の収集と書写に熱意を示し、ついにアレクサンドリア図書館につぐ大学術図書館を建設するに至った。プルターク (Plutarch) は、その図書館のことを美しい神殿に20万以上の蔵書を誇っていたと書いており、また、E・D・ジョンソンは、その図書館の設計は、アテネのアリストテレス図書館を模倣したものかも知れないと叙述し、ペルガモンの図書館は、明らかに古典ギリシア期図書館としてヘレニズム文化を表徴する一大学術図書館として誇り得るものに発展していたのであった。

ペルガモンでは、パピルス紙にかわるものとして羊皮紙を書写の材料とすることを案出したが、羊皮紙すなわち「パーチメント」(Parchment) という英語は、ペルガモンの紙を意味するギリシア語のペルガメーネーからきている。羊皮紙は中世期にキリスト教専用の用紙になったのであるが、既に紀元前2世紀頃ペルガモンは各国へ羊皮紙を供給する中心地であった。

ところがペルガモン図書館の蔵書は、その大部分がパピルス紙本であったとみられていて、その図書館蔵書の収集の多くがギリシア本土を中心になされたものと考えられ、ギリシアの学問思想を忠実に継承するということで、20万以上のギリシア文献が収集され、保存され、研究されたところにこのヘレニズム期学術図書館の文化史的意義が見出される。

ところが紀元前41年にローマの将軍アントニウス (Antonius) がペルガモンを鎮圧したとき、ペルガモン図書館の20万蔵書をエジプト女王クレオパトラ (Cleopatra) に贈り、これはアレクサンドリア図書館の一つセラピス神殿図書館の蔵書に加えられたと伝えられている。

アレクサンドリア図書館 アレクサンドリア (Alexandria) は、アレクサンダー大王が紀元前332年にエジプト遠征後、アレクサンドリア市を建設したのに起原する。この都市建設は、アリストテレスの理想国家としたギリシア的都市国家制 (ポリス) の思想の展開とみるべく、アレクサンダー大王の歿後、大王の部下将軍の一人であったプトレマイオス (Ptolemaios) はこの市に王朝を建設した。プトレマイオス一世 (367～282 B.C.) は、その備忘録をもとに「アレクサンダー伝」(285 B.C.) を著わしているほどで、アレクサンダー大王の遺志を継承して、アレクサンドリア市は、ギリシア的学芸文化の一大中心地として急速な発展をみた。殊に紀元前280年頃、宮殿の近くに建設された、王立のムセイオン (博物館) は、学問所 (当時のムセイオンは学問をする場所であった) として、多くのギリシアの学者たちを招聘し、また、数百名の研究員を地中海世界各地より集めて厚遇し、蔵書70万巻といわれる図書館をはじめ、あらゆる研究機関を完備し自由に研究、著作に従事せしめていた。

そのムセイオンの建設は、アリストテレスの学風を汲んだデメトリウス (Dē-

mētrius) が、プトレマイオス一世に進言したことによって着手をみたものと云われ、このムセイオンに図書館が併設され、プトレマイオス二世 (285~246 B. C.) に至って完成をみたのであった。ムセイオンは学芸の神に守護せられていると信ぜられ、その宏大な建物は、ホール、研究室、天文観測所、食堂、回廊、図書館、庭園などで構成されていた。プトレマイオス父子は、その図書館の資料収集に莫大な資金を投入し、当時、現存した学芸文献類の多くが集められ、ギリシア語の文献のほか、エジプト語、ヘブライ語、カルデア語、ラテン語などの諸文献をも自由に集め、それをギリシア語に翻訳した。学者のなかには、数学者、天文学者、医学者、地理学者、歴史学者、文学者たちがおり、もともとギリシア本土では、外国の文物を嫌い、殊に宗教の異なった国の書物を集めることを好まなかったが、アレクサンドリアのムセイオンでは、ギリシア以外の国の学者をも招聘し、学術書などは他国のものも競って収集する自由な風潮があった。このようにしてアレクサンドリア・ヘレニズムの文化的な学風を確立した。ムセイオンと大図書館を中心にして、文献類の文献学的、歴史学的研究が行なわれはじめ、文献に詳しい多くの書誌学者が現われ、その学者たちによって文献の調査、批判、校訂、編集がなされ、同時に文献類の標準写本をも作るようになった。こうした学問的風潮の抬頭が、アレクサンドリア図書館の重要性をいっそう助長し、アレクサンドリア図書館は、長い間にわたって栄え、世界的な文献類の貴重な集蔵所となることができたのである。

その図書館で働く写字生たちは、研究用の書物や保存用の書物を筆写したのみでなく、販売用の書物をも作成した。多数の写字生たちによって複写が行なわれ、それが市販され、アレクサンドリア図書館は書物の専売権を保有するようになった。

歴史的に長い間、教育・学問の中心といえは神殿であり、文字に詳しい学識者を育成する写字生養成学校は神殿図書館に附設されていた。ところがギリシアの歴史学者ストラボン (Strabon 64 B. C.~21 A. D. 以後) の記述によれば、アレクサンドリア図書館には写字生養成学校を附設していたとされ、そのことは図書館史のうえでも注目されることで、ここではじめて信仰と学術とが分かれ、その図書館の果していた学術上の重要性をいっそう示すものとなっている。

プトレマイオス二世のとき、大図書館とは別に小図書館をセラピス神殿内に設け、図書館史のうえでは大・小の図書館を併わせてアレクサンドリア図書館と云っている。それにしても大図書館が順調に発展しつつあるとき、セラピス神殿に小図書館をなぜ設ける必要があったのであろうか。図書館文化史のうえからみれば文教政策の一環としてプトレマイオス二世は、研究者用の大学術図書館とは別に、一般市民の集まるセラピス神殿に、広く公開すべく公共図書館を設けたのではないかということが考えられる。「西欧図書館史」の著書のなかで E・D・ジョソンは、セラピス神殿図書館について、「一般の学生や市民によって利用される公的性格のコレクションであった。」というように叙述している。明らかに

アレクサンドリア図書館が、一大学術図書館と公共図書館とを有機的に併せ設置していたということであれば、古典ギリシア期図書館の文化的本質を余すところなく発展させ、かつ高度に発揮したものとして特に注目しなければならないであろう。

当時、ムセイオンと併設図書館に関係することは、学問を志すものにとって大きな誇りと考えられていた。図書館と関係のあった著名な学者としては、デメトリオス (Dmetrios 290~282 B. C.), ゼノドトス (Zenodotos 282~260 B. C.), カリマコス (Kallimachos 260~240 B. C.), アポロニオス (Appollonios 240~230 B. C.), エラトステネス (Eratosthenēs 230~195 B. C.), アリストファネス (Aristophanes 195~180 B. C.), アリスタルコス (Aristarchos 160~131 B. C.), ケレモン (Chaeremon 50~70 A. D.), ディオニソス (Dionysius 100~120 A. D.) などが知られている。そのなかでも文献学者で詩人のカリマコスは、ギリシア文献史兼文学史ともいうべき、あらゆる分野にわたるすぐれた作家たちと、その作品との120巻にのぼる、いわゆるピナケス (Pinakes) 目録を編纂したことで注目されている。

ピナケス目録は、アレクサンドリア図書館蔵書の古写本類についての総合目録ともいうべきものであるが、その目録体系は、その主題の範疇を演説、歴史、法律、哲学、医学、抒情詩、悲劇、雑録といった類に分け、更に、その類をいくつかに細区分する方法をとり、それぞれの細区分のもとでは著者をアルファベット順に配列し、著者には略伝と、そのあとに著作のリストがつけられている。それぞれの著作には、標題と冒頭のことは、それに著作の全行数が記載されている。きわめて書誌的な構成になっており、この目録は、そののちギリシア・ローマ期に現われた目録の典型となり、図書館目録史のうえで今日からみても注目すべき古典的なものである。そして、その目録体系は、素朴ながら学問的にも極めて展開的な構成であり、実用的なものとしても高く評価されるべきものである。今日の多くの図書館学者のように、もし分類・目録学が図書館学の本質であるというのであれば、図書館学の鼻祖は近代の分類・目録学の学者であるというよりも、むしろまさしく古典ギリシア期に出現したカリマコスその人であると云わなければならないであろう。ただピナケス目録は、今日では、僅かにその残片があるに過ぎない。アレクサンドリアの大図書館も紀元前100年頃には漸く衰退の一路を辿っていたが、紀元前47年にジュリアス・シーザー (Caesar, Gaius Julius 120~44 B. C.) の率いるローマ軍によって破壊されたと云われている。その後、既述のようにローマの将軍アントニウスがベルガモン図書館の蔵書を接収してクレオパトラに贈り、これは小図書館のセラピス神殿の公共図書館の蔵書に加えられ、アレクサンドリア図書館の命脈を保っていたが、これも紀元391年、キリスト教徒の手によって破壊された。

図書館学者の間では、メソポタミアとエジプトの両古代文明の図書館思潮が古典ギリシア期図書館の発展にも影響を及ぼしているであろうとみている。ある学

者は、アレクサンドリアのムセオンと図書館の計画は、過去のエジプト文明に存在した大図書館を模倣したのではあるまいかと説き、また、他の学者のなかには、アッシリアのアッシュルバニパール王の図書館を模倣したのではないかとし、アレクサンドリア図書館との間の多くの類似点を指摘しながら述べている。もちろん、それらの学説は、筆者の説くような図書館文化史観のうえから云えば肯定され得る視点であるけれども、ただ、いずれも確証によって断定されるまでに至っていない。それにしても筆者の見解としては、アレクサンドリア図書館は既に述べてきたように王立ムセオンに併設の学術図書館的性格をもっていたもので、これはいわばアリストテレスの学問的精神にのっとって設けられた、新しいギリシア的な学問的研究施設であったといつてよく、この点からもアレクサンドリア図書館の大図書館は、単に過去の大図書館を模倣するにとどまったものでなく、古典ギリシア期文化の学芸思潮を表徴する、特色ある過去に比類のない大規模な学問的研究施設であったものとみられるのである。

上述してきたことから知られるのであるが古代図書館発達の主潮は、一方には神殿図書館を中心にして写字生養成学校とともに漸く公共図書館への発達を辿り、他方には時に王室（あるいは王立）図書館の学術図書館的性格を中心とするいちじるしい発展がみられた。それにしてもただ、神殿図書館より漸く発達した公共図書館は読書人口との関係などもあって、古代文明社会では必ずしも順調な発展を辿ったとは云えなかった。

「西欧図書館史」(A History of Libraries in the Western World)の著書のなかで E・D・ジョンソンは、「西欧図書館史がエジプト人とバビロニア人によって始まったとすれば、それは古典ギリシアにおいてその最初の黄金時代を迎えたと言える。」「たしかに、史上、古典ギリシアほど文明の中で、図書館の役割が立証された時代はなかった。」というように叙述しているが、その文化史の観点は筆者も全く同感であると云ってよい。アリストテレスの学問的精神を継承したアレクサンダー大王の世界的文化観は、エジプトという植民地にアレクサンドリア図書館という堂々たる学問的殿堂をプトレマイオス王朝が建設したことによって具現された。それは古典ギリシア本土文化の本質的な潮流をヘレニズム文化という学問的精神によっていっそう高揚するものであった。殊に、アレクサンドリア図書館のうちセラピス神殿の公共図書館は、ギリシア文化の継承ということから云えば直接にはアテネの公共図書館思想をとり入れて設けられたものとみることが出来る。しかも、このセラピス神殿の公共図書館は、恐らくエジプト遠征のシーザーがアレクサンドリア現地でその図書館の見聞によって後にローマに大規模な公共図書館建設の教育文化的抱負を描くに至る直接の影響を与えたものとも考えられる。アレクサンドリア図書館が古典ギリシア文化の潮流を吸んだ学問精神の振興を図る一大学術図書館と同時に、国家の良識ある自由市民教養形成に密着したセラピス神殿図書館のような公共図書館を併せ設置したということは、それが単にヘレニズム文化の高揚というのみでなく、現代文化思潮にとっても図書

館学思想の古典的原点としてまさに指摘さるべきことであると思われる。

参 考 文 献

- 1) Hessel, Alfred : A history of libraries. New Brunswick, N. J., 1955.
- 2) Johnson, E. D. : A history of libraries in the western world. New York, 1965.
- 3) Laessoe, Jorgen : People of ancient Assyria, their inscription and correspondence. New York, 1963.
- 4) Parsons, Edward A. : The Alexandrian library. New York, 1952.
- 5) Wilson, John Albert : The culture of ancient Egypt. Chicago, 1951.
- 6) Westermann, William L. : The library of ancient Alexandria. Alexandria, 1954.
- 7) Shera, J. H. : Sociological foundations of librarianship. London, Asia Publishing House, 1970.
- 8) ペーター・カールシュテット著, 加藤一英・河井弘志共訳 : 図書館社会学, 日本図書館協会, 1980.

(本学教授・共通学科)